

國學院大學学術情報リポジトリ

「共育」における学生の学びの実態と課題III：
地域と連携した学びの共同体づくりに向けて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小笠原, 優子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001318

〔報告〕

「共育」における学生の学びの実態と課題Ⅲ

—地域と連携した学びの共同体づくりに向けて—

小笠原 優子

【要旨】

本研究を通して、「教育実践総合センター」のこれまでの役割と教育インターンシップとかかわる「共育」における学生の学びの実態についてとらえ、今後の課題を述べる。教育インターンシップにかかわる6年間の学生数の変化等から実施状況を整理するとともに、教育インターンシップ実習後の「学生レポート」や「卒業生の聞き取り」からその学びと実態をとらえた。「学生レポート」については、学生が記述した文言・文章の特色から学生の学びの傾向をまとめ、「卒業生の聞き取り」では、教育インターンシップで身に付けた学びが「教職に就いてからの自分の教育活動にどうつながるか」を問い、学校現場での実践力とのかかわりを示した。学生の学びについては、「学生レポート」と「卒業生聞き取り」を関係付けながら考察し、「子どもとのかわり」や「教師という仕事」についての学びが具体的に見えてきた部分はあるが、学生個々の課題についての支援を今後どうすべきか対応の必要性が見えてきた。また、教育インターンシップの経験を共有し次の学びのステップにつなげる「共育の場」の設定についての課題も見えてきた。教育インターンシップやボランティア等で社会体験的な実習や活動がそれからの学生の学びの実態と課題についてどう影響するか、継続して分析する必要がある。

【キーワード】

共育 社会体験的な実習 地域連携 教育インターンシップ 子ども理解 実践力

1. はじめに

國學院大學人間開発学部設置されて7年目を迎える「教育実践総合センター」の役割は、社会体験的な演習・実習等を通した大学と地域社会の連携による「共育」の実践を行い、地域に育てられ地域と共に育つ人材の育成（人間開発学部の目的(3)）をすることである¹⁾。

これまでに教育実践総合センターでは、「教育インターンシップ」などの教科科目の支援を行ったり、学内外の関係機関との連携のもとに教育に関する理論的・実践的研究および指導に関わったりしてきた。

『「共育」における学生の学びの実態と課題』²⁾では、「教育インターンシップ」3年間の実施状況と学生の学び・成長について学生の活動とその振り返りの感想とを関連付けて『「共育」における学生の学びの実態と課題』を述べた。また、人間開発学部教育実践総合センター主催の夏季

教育講座、教育ボランティア等、地域教育機関等との連携の視点も踏まえて「『共育』における学生の学びの実態と課題」を述べた。

また、「『共育』における学生の学びの実態と課題Ⅱ」³⁾では、「教育インターンシップ」の4年間の実施状況と学生の「教育インターンシップ」に関する学びを関連付けながら、またその学生の学びの状況について学生の記録を中心に関係付けながら「『共育』における学生の学びの実態と課題」を述べた。さらに、人間開発学部一期生（平成25年3月卒業）の聞き取りを整理してまとめ、一期生の聞き取りから見えてくる教育現場の実態とも関わらせ、「『共育』における学生の学びの実態と課題」を探った。

本稿では、「教育インターンシップ」5年間の実施状況をまとめるとともに、「共育」における学生の学びの実態と課題について、「小中高等学校における平成26年度教育インターンシップに関する学生レポートの記述」と、「人間開発学部二期生（平成26年3月卒業）の聞き取り」から、探る。

具体的な方法としては、「学生レポートの記述」に見られる文言・文章の特色をまとめ、分析することを通して学生の学びの傾向を考察する。「二期生の聞き取り」では、教育インターンシップで身に付けた学びが「教職に就いてからの自分の教育活動にどうつながるか」を問い、学校現場での実践力とのかかわりを明確にしたい。

2. 人間開発学部における教育インターンシップ6年間の実施状況

本学部では、平成21年度に立ち上げた「教育ネットワーク会議」から引き続き、平成22年度から初等教育学科と健康体育学科の「教育インターンシップ」の授業を開講し、平成27年度に6年目をむかえた。なお、平成25年度に新設された「子ども支援学科」においても、平成26年度から「教育インターンシップ」が開講され、本年度で2年目の実施となった。

2-1 本学における「教育インターンシップ」の位置づけ

「教育インターンシップ」の授業は、人間開発学部共通の授業科目として位置づけられている。2年生以上の学年に開講される選択科目であり⁴⁾、2時間程度の実習を18回程度行うことが単位認定要件となる。教育インターンシップのテーマは「地域諸学校、地域福祉施設等の連携による実践体験型実習」とし、教育実習や保育実習に向け、「学校教育・保育の実際を学ぶ機会として実践体験型授業科目」である。主な目的として、「(1) 子どもたちとの交流を通して体験的な『子ども理解』を促進すること」「(2) 教育・保育現場の日常的業務や教育・保育の仕事についての理解を深めること」としている⁴⁾。

また、「単位認定条件の実習18回程度を上回る実習はボランティア活動とする」としている。

この他に、事前指導3回、報告会2回を年間の計画の中に位置づけている。

2-2 教育インターンシップに関わる学生数

「教育インターンシップ」にかかわる学生の人数は下表の通りである。

「教育インターンシップ」にかかわる学生の人数の変化 ※（ ）内は在籍者数

年 度	初等教育学科	健康体育学科	子ども支援学科	計
平成22年度	79名（107）	8名（117）	—	87名
平成23年度	66名（107）	14名（112）	—	80名
平成24年度	74名（107）	12名（106）	—	86名
平成25年度	68名（112）	16名（109）	—	84名
平成26年度	82名（108）	38名（114）	85名（103）	205名
平成27年度	85名（112）	51名（116）	52名（104）	188名

教育インターンシップにかかわる学生数は、平成22年度から25年度までは、80名程度で推移し、初等教育学科の学生に比べ健康体育学科の学生数がその1割から2割程度の状況が続いた。

平成26年度から子ども支援学科の学生も加わり、26年度205名、27年度188名と推移している。2年間の状況は、初等教育学科の学生は80名程度、健康体育学科の学生数は26年度38名、27年度51名となっている。子ども支援学科の学生は26年度85名と全体の7割を超える学生が選択したが、27年度は子ども支援学科の学生の半数である52名となった。

平成26年度からの健康体育学科の学生数の増加は、この年度の2年生から教育実習を3年次に行うことになったことが関わっていると思われる。健康体育学科の学生も教職に向けて早い時期から見通しをもって教育インターンシップを選択する学生が増えたと思われる。

初等教育学科と健康体育学科の学生については、23年度以降、学生一人の平均活動時間の増加、教育インターンシップ終了後の活動の継続の増加、出身校での教育インターンシップ実習者の増加、教育インターンシップ校と教育実習校の一致、等の傾向が続いている。学生の教職を目指す意識がここにも反映され、教育委員会や学校現場からの要望をふまえ、社会体験的な実習を通して進路を決定するケースが増加していると考えられる。

3. 教育インターンシップからの学生の学び・成長

3-1 学生の「レポート」に見られる学び・成長

ここでは、学生の「レポート」に見られる学びの実態と課題について、レポートにまとめられた文言及び文章の傾向から、見ていきたい。特に、小学校と中学校、高等学校での実習を行った学生に特定して記述する。

平成26年度のレポートの課題は、次のように示している。

教育インターンシップの2つの目標があります。

（1）子どもたちとの交流を通して体験的な「子ども理解」を促進すること、（2）教育現場の日常的業務や教育の仕事についての理解を深めることの2点です。この目標に照らして、あなたが教育インターンシップを通じて学んだことや考えた事を報告してください。

〔レポートの書き方〕

（1）子どもの理解について、（2）教師の仕事、（3）学校教育の場について、（4）これからの自己課題について、の4つの内容を書いてください。

平成26年度には、前年度までの項目に「これからの自己課題」が加わった。

平成26年度の4つの内容（1）子どもの理解について、（2）教師の仕事、（3）学校教育の場について、（4）これからの自己課題について、学生が記述した文言・文章の傾向を以下に示した。

（1）子どもの理解

	学生の記述した文言・文章 ※㊥は中学校、（ ）内数字は回答数
子どもとの かかわり方	・子どもは興味関心があり、生活の中に不思議や発見を感じている。 ・子どもは考え方が豊かで柔軟性がある。 ・子どもが考えていることが分からない。 ・一人一人個性が違うので一人一人の接し方を考える。（画一的指導は効果が上がらない。心を開いてくれない。）(11) ・環境、勉強の理解度など、一人一人違うので子どもを理解し、普段から一人一人の様子をよく見てサインに気付く。 ・「一人一人の子どもを知ろう」と向き合う。(3) ・子どもの立場に立って気持ちや考えを伝える。 ・授業時間と休み時間では子どもとの距離感が違う。 ・よい行いをしたときに褒め、間違った時に指導する。 ・特別支援学級の子どもを理解するのに時間がかかるが、向き合えばコミュニケーションがとれる。 ㊥・インターンシップでの生徒のかかわり方についてわからない。 ㊥・個性、性格に合わせた対応が必要。（これをすれば正解という万能な答えなどない）。 ㊥・生徒一人一人の目線に立って指導することが大切。 ㊥・生徒一人一人違う人間であるため、一人一人の対応を考える。 ㊥・課題のあるケースも見られるが、動機さえつけば本人たちの意思で努力し何事も充実させる力を持っている。

	㊥・教師が愛情深く接することにより生徒も教師を信頼しよりよい関係を築くことができる。
授業づくり	㊥・クラスごとの雰囲気や特徴に合わせた授業展開が必要。 ㊥・授業に集中させるには気持ちや能力を理解することが大切。 ㊥・子どもに方法や理由を考えさせることが大切。 ㊥・生徒の個性や能力に応じた指導で生徒が生き生きする。 ㊥・部活動でも個に応じた指導に力を入れると生徒の熱が入った。

「子ども理解」に関する表記の特色を以下に示す。

- ①「子どもの姿の豊かさ」を感じる記述とともに、「子どもが考えていることが分からない。」「インターンシップでの生徒とのかかわり方が分からない。」等、子どもとのかかわりに関する戸惑いの記述が見られる。
- ②「一人一人に」という表記を使った記述が見られる。（回答数17）

子どもとのかかわり方について、「一人一人に個性があるので」「一人一人が違うので」等の理由から、「接し方を考える」「一人一人の様子をよく見る」等の表記がある。また中・高等学校の場合では、そこから「個性、性格に合わせた対応」「クラスごとの雰囲気や特徴に合わせた授業展開」という表記がされている。

（2）教師の仕事

	学生の記述した文言・文章 ※㊥は中学校、（ ）内数字は回答数
具体的な 仕事の内容、 仕事量	・大変（7）（30人を一人で見える。） ・授業だけでなく、学校生活を通して一人一人を育てること。（2） ・いつも安全面を考えている。 ・子どもを理解し、学力や集団生活のマナーを身に付けさせる。 ・運動会では教師がすべてをこなす。 ・行事準備、家庭との連携等、役割が多い。（3） ・朝早くから夜遅くまで、休み時間や給食の時間まで仕事をする。 ・地域の方との関係づくり。 ㊥・プールの管理、研修、研究授業などの仕事もある。 ㊥・授業以外の裏の仕事がたくさんある。 ㊥・授業をやるだけでなく、生徒の身の安全確保や生活指導、地域への対応など、幅広いことが要求される。

教師の姿勢 指導方法	・叱り方とほめ方を考えている。 ・愛情をもって優しさと厳しさを表現する。 ・よさを子どもから引き出し学級に活かす。 ・長所短所を分析しその子に合わせた対応が必要。 ・一人一人を見つめ、その子に合ったアドバイスをし、潜在的な力を引き出す。(3) ・必要以上に力を貸さない。見守り考えさせることが大切。 ・子どもの「人間性」を豊かにし、子どもに人間力をつける。 ・どうしたら子どもたちが成長できるのか、子どもたちにわかりやすい授業ができるか考える。 ・意欲的に取り組めるための教材研究や授業研究が大切。 ・子どもの手本として行動し「学ぶ」ことを深めていく。 ・よりよい学習環境を作る。 ・今まで見えていなかったことに「気付かせる」。 ・教えることが全てではなく、授業以外の場で子どもたちを成長させるために様々な仕事をする。(3) ・子どもの人権や安全を守る。(3) ・特別支援学級の子どもの自立をめざし、すべてを教えるのではなく考えさせる。 ㊦・授業展開を工夫し段階を踏んだ生徒が楽しめる授業を考える。 ㊦・勉強だけでなく生徒指導にも力を入れる。 ㊦・生徒をよく見て（性格、集団の中の立ち位置、体調）それぞれに合わせて声をかける。 ㊦・楽しむときは一緒に楽しむが、しめるときはしっかりと指示するなどメリハリをつける。 ㊦・一人一人が考えていることを理解し、その考えに対し指導する。
---------------	---

「教師の仕事」に関する表記の特色を以下に示す。

- ①教師の仕事については、「大変」「役割が多い」という記述が見られる。(回答数10)「仕事の種類や役割が多い」「朝から夜遅くまで」「休み時間や給食の時間まで仕事をする事」等、仕事の範囲や時間等を示している記述がある。
- ②「教師の仕事」の「指導」にかかわる表記については、「子どもが意欲的に取り組む教材研究や授業研究」「授業展開の工夫」というように授業に関する表記も見られるが、「休み時間のかかわり」「運動会」「行事の準備」「生徒指導」「授業の準備」「地域とのかかわり」「研修」等、授業以外の仕事に関する記述が見られる。

- ③「叱り方や褒め方」「優しさと厳しさ」「必要以上に力を貸さない、見守り考えさせる」等、教師の姿勢や指導方法の記述では、相反する文言の記述が見られる。様々な方向からの子どもへのアプローチが見られる。
- ④「子どもの人権や安全を守る」「生徒の身の安全確保や生徒指導」「いつも安全面を考えている」等、「安全面」「人権」に関する記述が見られる。（回答数3）

(3) 学校教育の場について

	学生の記述した文言・文章 ※㊥は中学校、（ ）内数字は回答数
子どもの学び とのかかわり	・集団行動の基礎を学ぶ場。 ・集団生活の中で自分を見つけ仲間を作る場。 ・集団生活を学ぶ子どもたちが初めて所属する小さな社会。 ・人が最初に「協力」というものを学ぶ重要な場。 ・社会で生きていく上で大切なルールを学ぶ場。 ・友達や先生や新しいことに出会い、自分を成長させてくれる場。 ・子どもたちがしやすい場であるべき。（学習環境、家庭環境等、おかれている環境からの不安ストレスの逃げ場にもなる） ・子どもと教師の距離が近い。 ・教師によってクラスの雰囲気が変わる。 ・子ども主体の実践的な授業づくりが求められている。（2） ・学校全体で一人の子どもと向き合い育てようとしている。休み時間に声をかけている（4） ・エレベーターの設置、個別指導など子どもに合わせた措置が取られている。 ・普通学級と特別支援学級の子ども同士のかかわりがある。 ・特別支援学級の子どもが交流級の子どものと馴染むことができるようにするには教師の役割は大きい。 ・事務の方や保護者、地域の方にも支えられている。 ・児童の安全に関する注意が必要。 ㊥・協調性やコミュニケーション能力など、社会で必要とされるものを身につける場。 ㊥・1日のほとんどを学校で過ごす中学生。学校教育は重要。 ㊥・安心してよりよい環境の中で勉強できるようにする。
「学校」の イメージ	・個々の学校によって特色がある。 ・現場の実情は壮絶なもの（ただ楽しく勉強する場と思っていた。） ・教師の手が足りていないのではないか。

「学校教育の場」に関する表記の特色を以下に示す。

- ①「集団行動」「集団生活」「協力」「社会」「協調性」「コミュニケーション」というように、集団や社会や人とのかかわりに関する記述が見られる（回答数7）。
- ②「普通学級と特別支援学級の子ども同士のかかわりがある」等、特別支援にかかわる表記が見られる（回答数3）。
- ③「学校」について、「現場の実情は壮絶なもの」「教師の手が足りていない」等、学校現場の多忙感や教育現場の問題点についての記述が見られる。

(4) これからの自己課題について

学生の記述した文言・文章 ※㊤は中学校、（ ）内数字は回答数
・子どもたちに対しいけないことはいけないと注意する。(6) ・すべての子どもと適切な距離感を作る。教師と児童という関係に近づきたい。(3) ・全体学習と個別学習のメリハリをつける。クラス全体を客観視できる力もつけたい。(3) ・優しく面白い存在だけではなく、きちんと指導するなどメリハリをつけたい。 ・指導者の側に立てない中途半端な自分がいた。教師の目線で物事をとらえ考えられるようになりたい。 ・子どもがどのような気持ちかは少しわかるようになったが、どのように導けばよいかを探る。 ・子どもは教師をよく見ている。あいさつなど基本的なマナーや学習面の指導など力をつけたい。 ・子どもとのかかわり方、対応の仕方など、以前と違う視点をさらに身につけたい。 ・児童と触れ合う機会を多くもつ。自分から子どもに声をかける。 ・楽しくわかりやすく意欲的に学ぶための指導や声かけが出来るようにコミュニケーション能力をつけたい。 ・教師の仕事の新しい面を知り、自分に足りない所が見えた。 ・人を観察する力をつける。 ・教育の見方についての自分の甘さを捨てたい。やりがいのある仕事と思い人間性を磨きたい。 ・経験を積んで力をつけてよい助言のできる大人になりたい。 ・信頼される先生になるために知識や考え方を身に付け自分を磨く。 ・安全面や人権に対する意識が足りなかったので意識をもって指導に当たりたい。 ・教員として臨機応変に対応する力をつけたい。(3) ・視野を広げ、信頼関係を築くために教師と児童の関係について学ぶ。 ・子どもとの関係、教師の授業づくりの工夫、発問、板書など勉強になったことを教育実習でも生かしたい。 ・自分の意思を自分の言葉で伝えることを行いたい。大学の授業も受け身で聞くのではなく、自分の意思をもって話し合うなど、克服できるようにしたい。

- ・子どもが理解しわかりやすく指導できるように基本的な指導力をつけたい。
- ・理解できない児童に対しわかるようになるための働きかけ。
- ・「自分から気づく」ように教師が「待つ」指導を探っていききたい。
- ・先生とのコミュニケーションの力をつける。
- ・物事を一面的にしか見られないという欠点があった。

- ㊦・生徒の接し方が課題。同じ目線に立つことはよいが、同じ立ち位置になってはいけなし上から見下ろすのもよくない。
- ㊦・注意しなければならない場面とほめる場面を判断し、生徒の持つ力を伸ばしていくことが課題。
- ㊦・自分自身の教養の足りなさ、視野の狭さ、考えの浅さなどが分かった。
- ㊦・理想の教師像と現実の教育現場はかなり違った。（実技ができない、見本を見せられない、叱ることができない自分に気付いた。）
- ㊦・教材について研究し専門知識を身に付ける。（体育の練習方法、指導方法、コツ、ルールなど）（2）
- ㊦・ニュース等身近な出来事と学校での指導と絡めた話ができるようにしたい。
- ㊦・生徒をひきつけるような導入の研究。
- ㊦・クラスの雰囲気や個性に合わせて授業展開するために、観察し特徴をとらえる目を養う。
- ㊦・危険を未然に防ぐために周りを見る目を養う。
- ㊦・教師に必要な基礎知識を身に付け、その情報を伝えられるコミュニケーション能力を培う。
- ㊦・生徒の理解、教壇に立つ覚悟、生徒への伝え方など、教育実習に向け力をつける。
- ㊦・特別支援学級に入って生徒が理解できるように要領よく説明するむずかしさを実感。生徒のことを少しずつ理解できるようになったので生徒に合った話し方の工夫を学びたい。

「これからの自己課題」に関する表記の特色を以下に示す。

- ①「いけないことはいけないと注意する」「子どもとの適切な距離間」「指導の側に立った時の」「教師の目線で」「（生徒と）同じ目線、同じ立ち位置」「注意の場面とほめる場面」等、「学生」という立場で子どもたちと接しながらも将来自分が教壇に立つことをふまえ自身の行動を振り返る記述が見られる（回答数13）。
- ②小学校実習の学生からは、「教師としての対応力」「コミュニケーション力」「観察力」「基本的な指導力」等、つけていくべき力についての課題が記述されているが、授業や指導に関わる具体的な力についての表現はあまり見られない。
- ③中・高等学校で実習を行った学生からは、「導入の研究」「教材についての研究」「個性に合わせた授業展開」等、中学校保健体育の授業や生徒指導につながる記述が見られる（回答数8）。

3-2 二期生の聞き取りから見られる学び・成長

ここでは、卒業生である二期生の聞き取りから見られる学び・成長について述べたい。社会体験的な実習を教育インターンシップからスタートさせ、そこからどのように教職に就くまでの過程を経たのか、教壇に立つ現在の自分の教育活動にどうつながっているか、「二期生の聞き取り」では、教育インターンシップで身に付けた学びが「教職に就いてからの自分の教育活動にどうつながるか」を問い、学校現場での実践力とのかかわりを明確にしたい。

現在教育現場で子どもたちを指導する二期生に以下のような質問をし、聞き取りを行った。

「教育インターンシップ、教育ボランティアの経験を通しての学びと課題が、教職に就くまでの自分、教職に就いてからの自分にどうつながっているか。どう影響しているか。」

【凡例】 ① インターンシップ 困 ボランティア 教 教育実習 勤 現在の勤務校
◇ 経験 ◆ 現在

二期生	聞き取った内容
R 教諭 ① 公立M小学校 困 公立M小学校 教 公立M小学校 困 公立A小学校 勤 公立Y小学校	◇<u>たくさんの宿泊体験学習の経験</u>から、学校現場に行っても安心して取り組むことができた。横浜市の宿泊体験学習の経験をいくつもしてきたので、現場に入ってから宿泊体験学習でも地図を見ずに動けるくらいになっていたため、自然の中での活動に戸惑うことがなく、子どものことを中心に考えることができた。子どもの対応としては、夜、不安で寝付けない子どもに付き添って眠るまで一緒に話をした経験があり、家から離れた時の子どもの不安感についても知ることができた。 ◇教育インターンシップでの個別支援学級での経験が今の学級づくりにも生きていると感じている。現在、個別支援学級の子どもが交流級である自分のクラスに来たときに安心できる環境づくりを心掛けている。保護者からの「交流、楽しいみたいです。」の声や、子どもたちからの「もっと一緒に勉強したり給食食べたりしたい。」という言葉聞くことができ、「教育インターンシップをやってよかった」と感じた。 ◇<u>さまざまな配慮</u>が必要な子どもたちに対して、焦らずに対応できるようになったと感じている。効果的な対応になっているかについてはまだ課題があるが、<u>学生時代にたくさんの子どもたちとかかわってきたので、自分の視野が広がったと感じている。</u> 実践力 ◇学生時代にかかわらせていただいた体育や音楽の授業で、場の設定や、用具や楽器の使い方、安全面の配慮、苦手な子どもへの配慮など多くの指導方法、子どもへの対応について学んだ。特に実技のすぐできない子どもたちにどう興味をもたせ充実感を味わわせるかということについて学ぶことが多かった。

K教諭 ① 公立 I 小学校 困 公立 I 小学校 教 公立 I 小学校 困 公立 I 小学校 困 公立 H 小学校 勤 公立 A 小学校	◇<u>全学年全学級</u>で活動する機会があり、学年ごとの子どもたちの様子を知ることができた。また、複数の学校で活動し、地域によって子どもたちの様子が異なることを体験的に理解した。 ◇<u>個別支援学級</u>での活動から、子どもたち一人一人が抱える課題は様々であり、一般的に当たり前と思われることが当たり前のようにできることは大変なことだと学んだ。 →◆子ども一人一人の得意なこと、苦手なことなど、記録を細かくとること、声掛けや指導をする際に実態や特性を考慮しながら行うようになった。寛容になった。 ◇子どもたちの笑顔があふれる学級は、教師も常に笑顔であること。大人と子どもという関係だけでなく、<u>一人の人間</u>としてのかかわりも大事であること。 →◆なんでも理屈ありき、正しいか正しくないかの思考だった自分の概念が変わった。一人の人間として、<u>社会で働く先輩</u>として「やってはいけないこと」や「許してはいけないこと」を考え、指導に生かすようになった。教師は、面白い存在である必要があると感じた。（パフォーマンスという面で） ◇宿泊体験学習では、同じ場所であっても、学校や教師が異なれば、活動は大きく異なること。家庭での生活や姿がそのまま表れてしまうことを学んだ。 →◆「何を学ばせたいのか」「どんなことに取り組ませたいのか」など、<u>教師の願いや子どもの実態</u>に合わせて、活動を変えること。学校生活だけでなく、日常生活（家庭での）においても、自立に向かうよう支援する必要があることを考えるようになった。
N教諭 ① 公立 D 小学校 教 公立 D 小学校 困 公立 T 小学校 勤 公立 K 小学校	教育インターンシップ……個別支援級で学んだこと ◇一人一人にあった声のかけ方、支援の仕方。それぞれの段階に合わせて支援の方法を選ぶことで「<u>できる</u>」を積み重ねていく。そうすると自信や次のやる気につながることを学んだ。<u>どの子にも輝ける場面</u>があるから教師として、子どもたちの輝ける場面を見つけ引き出していきたいという自身の教育観へ影響している。 （ただ当時は第三者的な立場だったためか、「それが当たり前」と思っていたが、一人一人を見とりその子に合う声かけをする難しさを今になって痛感している。） ボランティア……3年生の学級で学んだこと ◇意見や考えを尊重することで、豊かな学級経営につながる「<u>総合的な学習</u>」に力を入れている学校であった。総合的な学習の時間を中心に、<u>どの教科でも子どもの考えを尊重する</u>様子が印象的であった。子どもの「<u>やってみたい</u>」や「<u>なぜだろう</u>」と思うことを挑戦できる・言える温かな学級づくりをしていきたいと感じ今の自分につながっている。 実践力 ◇学級全体での課題や目当ての設定をするが、その中でも、少しのことでもできるようにしたらほめて認めていくようにしている。

C 教諭 ① 公立K小学校 教 公立K小学校 困 公立K小学校 勤 公立C小学校	◇学校現場を実際に見るだけでなく、<u>たくさん子ども</u>とかかわることが出来たので、自分の目指したい教師像やそのために付けなければならない<u>力</u>を明確にすることができた。それらを一番身につけられたのもインターンシップやボランティアでの活動だった。 ◇大学1年の時は、体育教師を目指していたが、当時行った運動会のボランティアで小学生とかかわり、子どもと一緒に活動していく中で、なんとなくではあったが、小学校の先生になりたいと思うようになった。（それまでは小学校は全く考えていなかった。） ◇継続してボランティアに行くうちに、多くの教科で子どもとかかわことができ、それぞれで子どものよさを見つけられて楽しいと思うようになった。また、子どものよさをいろいろな面で引き出してあげられるようになりたいとも思うようになった。大学1年の時のボランティアが小学校の先生という目標をもたせてくれた。 ◇大学2年以降の活動の中ではたくさんのことを学ぶことができた。 ①子どもとかかわり方 <u>さまざまな実態の子ども</u>がいて、それぞれと接することができたので、声のかけ方を変える必要があること、表情を見て声をかけてあげるということを学べた。 →◆現在一人一人に声のかけ方を工夫して接していつているところ、意見を言えない子も何かしらの方法で思いを伝えることができています。また、伝わっていないさそうなとき、違う言葉を選んで伝える工夫もできるようになった。 ②一般級での個別支援の仕方 ボランティアでは、<u>筋ジストロフィーの子どもの支援</u>を主に行っていた。始めのころは、担任の先生に言われたことだけを行っていたが、「<u>自分が先生になったら</u>」と考えたら、たくさんことを学ぶことが出来た。また、困っているときに気付いてあげ、自分から進んで動いたり、困らないように支援したりすることができるようになった。 →◆教師になってから、昨年度は骨折で車いすの子、今年度はペルテス病で装具をつけている子と支援が必要な子が学級にいた。ボランティアの時に、その子ができるよう授業が工夫されていたり、他の児童のその子に対するかかわり方がよかったりしたのを見ていたので、思い出しながら授業づくりを行っている。特に体育の授業では、その子にもできるルールをみんなで考えたり、出来ない時はアドバイスのプロになってもらったりして、活動に参加できるような工夫をしてきた。「みんなで」という意識を持たせることができたのは、筋ジストロフィーの子の支援を行っていく中で、担任の先生の工夫をたくさん見ることができたからだと思う。このような経験をしていなかったら、どうしたらよいか分からず、悩んだりいやな思いをさせてしまったりしていたかもしれないと思うと、ボランティアに行っていてよかったと思う。
--	--

	③授業づくり たくさんの先生の授業を見ることができたので、授業展開、方法、板書、声のかけ方などたくさん学ぶことができた。 →◆学年に合わせた声のかけ方は、縦割り活動をたくさんやっている今の学校では、とても役に立っている。教師になると、他学年の授業を見る機会がほとんどないので、大学時代に学べてよかったし、そのおかげで1～6年生までの子どもたちとかわることができていると思う。 K小学校でいろいろな先生の動きを見てきたことで、子どもとの接し方、授業づくり、時間の使い方、臨機応変に対応するという様々な点で、現在の教師生活に役立っていると思う。
--	--

4名の二期生は、教職について今年度で2年目をむかえている。二期生からの聞き取りから、それぞれの教育インターンシップやボランティアの経験の違いとそこからの学び、進んだ道の違い、経験から学んだことを現在の学級経営や子どもの指導に活かしていること、それらにかかわる実践力について読み取ることができる。

二期生の聞き取りの回答では、次のような言葉が見られる。

- ①「たくさんの経験」「たくさん子ども」「さまざまな配慮」「全学年全学級」「複数の学校」「どの教科でも」「たくさんの先生の授業」「いろいろな先生の動き」というように経験の多さに関わる表現が多い。
- ②「個別支援学級での経験」「個別支援学級での支援」「筋ジストロフィーの児童の支援」等の経験から、特別支援教育の学びについて回答している。
- ③教師としてどうあるべきかにつながる言葉の回答が見られる。「一人の人間としてのかかわり」「社会で働く先輩として」というように自分の姿勢について表されたもの、「目指したい教師像」「そのために付けなければならない力」「どのような子どもに育てたいか」等、目標をもつことの意味について表記されたものがあり、それぞれの教師としての姿勢が伝わってくる。

4. 考察

4-1 6年間の成果と課題

社会的な演習・実践等を通した大学と地域社会の連携による「共育」の実践について、教育インターンシップの状況と教育インターンシップを経験した学生の学びを、学生のリポートと卒業生（二期生）の聞き取りを中心に見てきた。

(1) 成果

学生リポートから見られる学生の学び・成長に関する成果を卒業生の回答と関わらせてまとめる。

①児童生徒「一人一人」に目を向け個性をとらえようとする子ども理解

「一人一人」や「個性」の表記について、量、内容とも多く見られた。教育インターンシップでの子どもとのかかわりを具体的事例に即して考えようとしている状況が見られ、児童生徒「一人一人」に対する理解とかかわり方について意識し、個性や能力に応じた指導について注目する学生が多いことが分かる。

卒業生の聞き取りからも経験の多さとともに、「一人」に時間をかけてかかわったことからの学びが現在の力に活かしていることについて述べられている。「一人一人」の課題はそれぞれ異なり対応も「一人一人」異なることが指摘されている。

②教師の仕事の種類と内容の理解

学生レポートの中に、教育現場での様々な経験を通して仕事の内容を肌で感じ、準備にかかる時間の多さや内容の多さに圧倒されている面が見られる。そこから、学生という立場の自分自身の行動を振り返り、教師の立場に目を向けようとする姿勢も見られる。

卒業生の聞き取りからは、子どもとの接し方、授業づくり、時間の使い方、臨機応変に対応するという様々な点で、現在の教師生活に役立っていることが記述されている。

③子どもとの具体的なかかわりを通した経験の充実

学生レポートの中に、子どもとのかかわりに関する具体的な表記が多く見られた。この背景として学生が教育インターンシップを通して教師や子どもたちとのかかわり方が密接になってきたこと、学生に見える状況の範囲が広がってきたこと、見方が育ってきたこと等が考えられる。

④子どもの実態をとらえ様々な方向からアプローチする教師の指導法や対応の理解

学生レポートから子どもの実態や個性をとらえ、様々な方向から子どもとかわることや多様な対応の必要性を感じている様子がうかがえる。

卒業生の聞き取りからは、「多くのことから見出した答えは一つではなく、指導方法も子どもへの対応も答えは一つではないこと」の回答があり、「いかに問題意識をもって自分で考え判断し対応するかということが学校現場での大切な力になる」としている。

⑤安全教育、人権教育、特別支援教育の理解

学生レポートの中に「安全」「人権」「特別支援」についての表記が見られ、これらの視点についての意識が感じられる。「普通学級と特別支援学級の子ども同士のかかわりがある」という表記から学生の中には実習前に交流の知識がなかったことがうかがえるため、教育インターンシップの経験が大きな学びのきっかけになったと考えられる。

卒業生の聞き取りからも、この「個別支援学級での経験」が「今の学級づくりにも生きている」こと、「個別支援学級での経験」から、「子どもたち一人一人が抱える課題は様々であり、一般的に当たり前と思われることが当たり前のようにできることは大変なことだと学んだ。」等の回答が見られる。「児童一人一人の得意なこと、苦手なことなど、記録を細かくとること、声

掛け等をする際に実態や特性を考慮しながら行うようになった。寛容になった。」と自分自身が変わったことについても触れている。「大学の1年生から4年生まで筋ジストロフィーの子どもの支援」でこの児童と関わった経験は、授業で「活動に参加できるような工夫」をするなど、現在の学級指導でも活かされている。

(2) 課題

最後に、学生レポートから見られる学生の学び・成長に関する課題を卒業生の回答とかかわらせ考察する。

①学生の課題の解決に関わる支援

「子どもが考えていることが分からない」「インターンシップでの生徒とのかかわり方が分からない」等、子どものかかわり方について学生が困っている状況が見られた。また、中・高等学校の体育の授業に関わる専門的知識にかかわる課題も見られた。教育インターンシップという社会体験的な演習・実習を通して自分を見つめる機会ととらえられるが、これらの学生の課題に対応する支援が必要となる。

②教育インターンシップの経験を次のステップにつなげる学びの交流

教育インターンシップでの学びを生かすためには、学生一人一人の課題に合わせた支援を充実させるとともに、学生自身が実感した学びを交流する情報交換の場を充実させる必要がある。

学生レポートや卒業生の聞き取りに見られるように、教育インターンシップを通して、「様々な出会いがあること」「学生一人一人によって出会う内容や状況が異なること」「その出会いからの学生の感想や学びが異なること」等が、状況として見られる。個人の学びに終わらせることなく、経験の報告やテーマに沿った議論等、共有する場面が必要であると考ええる。

教育インターンシップでのそれぞれの経験の中にこれからの力につながることもあり、学生は、それぞれの事例の中に教育という仕事として身に付けるべき要素が込められていることに気付く必要がある。そして、それらを踏まえ学生の様々な事例に関する学びと課題を共有することが重要であり、共に学ぶ機会を設定できるように検討していくことに大きな意味があると考ええる。

③子ども「一人一人の」「個性の」の見とりから集団の指導につなげる学び

学生レポートに、「一人一人」「個性」に注目し子どもと関わろうとする学びが多く見られた。それとともに学生は、「学校という場」について、集団や社会や人とのかかわりの中で学ばせることについても記述している。

実際の学校生活や授業の中では、子どもたち一人一人を丁寧に見とるとともに、集団の中で一人一人の見方や考え方、あるいはよさや個性を生かし子どもたち同士がかわり合い共に学ぶことが求められる。

子どもの見とりを実際の授業や集団での活動や学習にどうつなげていくべきかを、次へのス

トップの学びの視点として学生が意識し問題解決していけるよう支援していく必要がある。

教育実践総合センターとして、学生の課題をとらえるとともに、経験からの学びをもとに学生が共に学ぶ機会を充実させることができるように今後も学生の支援の方法について探っていきたい。

【引用】

- 1) 人間開発学部ガイドブック 平成26年4月 國學院大學人間開発学部教務委員会 P11
- 2) 小笠原優子：「共育」における学生の学びの実態と課題－地域と連携した学びの共同体づくりに向けて－
國學院大學紀要 P61－70 平成25年2月
- 3) 小笠原優子：「共育」における学生の学びの実態と課題Ⅱ－地域と連携した学びの共同体づくりに向けて－
國學院大學紀要 P105－117 平成27年2月
- 4) 教育インターンシップガイドブック 平成26年1月 國學院大學人間開発学部教育実践総合センター運営委員会 P1, 平成27年1月

（おがさわらゆうこ 國學院大學教育開発推進機構准教授、本会賛助会員）